

ふるさと（霞ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える

ふるさと 風

第148号（2018年9月）

風に吹かれて（125）

白井啓治

・庭草の三日目には花をつけ

この夏最も元氣だったのは庭草と藪つ蚊の奴。連日35℃を超す猛暑だったにもかかわらず、庭草の奴め、乾いた地面にしつかりと根を潜らせ、緑々とした逞しく立派な葉を茂らせている。猛暑に挑戦するようにして庭草を退治するが、翌日には朝露も十分に下りないのに確りと芽を出している。そして三日が過ぎるともう花をつけ、次の世代を生み出している。熱の時は熱殺するとは、まさに庭草達の生きざまと言えよう。

猛暑の中、今年も広島、長崎の原爆記念日が来て、太平洋戦争の敗戦記念日が来る。原爆を非人道的大量殺人兵器としてその廃絶は誰しもが願うことである。我が国は唯一戦争で核兵器の使用された国である。その非人道性は地球の存続する限り、人類が存続する限り声を大にして廃絶を訴えていく必要があるだろう。

米国の多くの人達が、原爆投下によって戦争を終わらせたと考えている。ある側面においてはそうとも言えるだろう。しかしだからと言って核兵器の使用を正当化するものではない。

日本人の多くは、被害者としての話しかしい。

だがポツダム宣言を速やかに受け入れていれば、日本への原爆投下はなかったことを考えた時、国の政を行う者たちの愚かすぎる見識と行動の末路について、深く学ばねばならないだろう。愚か者に権力を与えてしまうことの破滅的危険を日常の経験則の知恵として持つことが必要だろう。

ふと思った。日本に原爆が投下されなくて終戦を迎えたとしたら、実戦における原爆投下は何処でされたらどうかと。SF小説ではないが、間違いなく朝鮮戦争で使われただろうと思う。

人間とは愚かなもので、現実の恐怖体験がない限り、それを恐怖しようとしなないのだから。武器が武器であるためには、武器としての実際力を示さねばならないのだから。しかしそれは強者である大国間での直接使用は、決してないのである。実験は、モルモットと同様に弱者の所で行われるもののだから。

今日の日本の政に大いなる危険を感じている人は大勢いるだろう。その危険信号は、直接国の政の中にだけではなくいろいろな組織の中にハイシリッヒの法則のように出て来るものである。付度問題に始まり、いろいろな組織から膿が滲み出てきている。機関銃の脅威を竹槍で退治してやるなどの話はもう御免である。

9月になるとこの地はお祭り一色のようになる。お祭りで大賑わいするのは良いことであるが、独り善がりの空騒ぎでは只の騒音に終わってしまう。何年か前になるが、審書房の故太田尚一氏が、石岡の祭りと称される常陸総社宮例大祭の歴史認識の問題点についての文章を投稿いただいたことがあり、今回も紙面があれば紹介しようと思っていたが、生憎紙面を割けなかった。

市でも、お祭りを重要な観光資源のように扱っているようだが、今の状態では観光資源と呼ぶには余りにもお粗末が多すぎるといえる。祇園祭形式の祭りが何で総社なのかも不思議である。歴史というのは事実を意味するものだから、確りとした事実として示さねばならないだろう。そうしないと観光資源として重要な知的好奇心を満たすものが何もないということになる。

こう言うと、お前は他所者だからと言われるが他所者だからこそ知的好奇心があるかないかが良く見えるのである。歴史というのは古ければ価値があるというものではない。如何に古いと言っても、そこに事実を示すものがなければそれは歴史ではなく、勝手な歴史認識と言うことになる。

歴史というのは事実という意味であり、歴史認識とは自分の都合の良い昔の言い分、と言うことである。

阿波踊りが運営上の問題でニュースに騒がれたが、お祭りによって特定の組織などが利を得るという時代ではもうない。歴史の里石岡と掲げ称するのであれば、知的好奇心を満たす歴史ガイドやイベント情報を構築することが必要ではないだろうか。人は知的好奇心の臭いのするところに集まってくるものだということを認識し、それに向かっての思考を創らねば町は死ぬ。

災害多発国日本

菅原茂美

日本列島は、豪雨などによる災害があまりにも多すぎる。堤防決壊や土石流など、毎年のように繰り返す。更に地震多発国でもあり、災害対策は、根本的に直しが必要だ。

まず地震については、この百年間を調べると、マグニチュード(M)5以上の大規模地震発生数は、世界の11%、M6以上は20%である。日本の国土面積は世界の0.25%(第62位)に過ぎないのに、地震発生数は約2割。活断層は2千か所もあり、活火山は111座で世界の7%。これでは地震が多いのも無理はない。特に関東北部は、世界に例を見ない4枚のプレートが、ガッチンコの取っ組み合い。これでは屋台が、ガタつかないわけがない。

【世界の国土面積ランキング1位ロシア11.5%、2位カナダ6.7%、3位アメリカ6.5%、4位中国、5位ブラジル、6位オーストラリア、7位インド。なお南極大陸は多くの国が部分的領有権を主張しているが、1959年「南極条約」により凍結中。南極は北極より20℃も寒い。】

*

さて今回は地震がテーマではない。西日本に起きた豪雨による巨大災害だ。原因は地球温暖化と思われるが、この原稿を書いている7月15日現在、新聞報道によれば死者211人、安否不明者は21名、避難者数85800人。土石流257件、崖崩れ538件、地滑り35件、計830件である。

特に広島・岡山県では、ガケ崩れ、土石流、或いは溜池や河川の堤防決壊で家屋倒壊・流失。尊い命が多数失われ、テレビの映像を見ると、ある被災例は、あまりにもきれいな新しい家が倒壊しているの不思議に思い、ニュースを追っていく

と、築2年の新築家屋であるという。

当然、新築は行政の建築許可が必要。ならばこんな危険な場所が、なぜに許可されたのであろうか。行政批判は、確たる根拠なくして軽々に口出しすべきではないが、何か許可を与えるに足る明確な根拠があったのであろうか。

卑近な想定で恐縮だが、もし何かの強力な権力により、ゴリ押しの許可されたのであれば、責任重大な案件である。先人の経験で、昔から危険が伴うので、山際や川傍に、家は建てるべきではない……という言い伝えはあるはず。

造成した宅地の直ぐ傍まで、山裾が迫っている、山崩れも有り得る。或いは造成宅地の傍の川の上流に、溜池、砂防ダムなどいくつもあり、堤防決壊したら何十年に一度の大雨で流木を交えた土石流が押し寄せ、橋や人家などひとたまりもない。こんな事は、行政担当者は重々承知の筈。しかし、危険で安い土地を高く売りたい関係者にとって、危険区域指定の公表は大変迷惑な話。人命よりも、まず人間の「欲」が絡んでいる。しかし、真の行政は、危険と分かっている場所に軽々に許可を与えてはいけない。

その辺が高度に成熟した社会か、自由主義を己の欲望で勝手に振り回す未熟な社会かの分かれ目であろう。権力者・有力者の圧力で、無知の人々や、腹黒い者からの申請を安易に受け入れ、許可する様式は、厳に慎むべきである。

災害は慎重に分析する必要がある。新たに事をなすには、祖父母からの言い伝えぐらいでは、せいぜい100年ぐらいまでしか経験を生かせない。

「古文書」か「発掘調査」などにより、その土地の古い過去を知る必要がある。そして過去の歴史を重んじる謙虚な姿勢が最重要。

2011年の東日本大震災における原発事故は、1150年前の「貞観大地震」の経過を重んじる態度が、経営者や政府に厳格に存在すれば、津波が20メートルを超えた記録があったのだから、それに勝る大津波が来る可能性は予測できた筈。原発を高い津波から守る謙虚な精神があれば、勇気を奮って許可しないぐらいの態度があつてしかるべき。経済優先で人命は後回し……と罵られても仕様のない政府の許可であつた。

山間部での日本古来の米作りは、貯水池や砂防ダムなどにより、「水」を操ってきたに相違ない。しかし、今や地球温暖化により、海水が大量に蒸発して積乱雲を連発させ、水分の多い雲は高い所まで上昇しないため、偏西風などで簡単に移動しない。即ち集中豪雨である。太平洋高気圧が強く、オホーツク高気圧もそれに劣らず強く、両者が列島上で張り合えば、前線が停滞し、2〜3日で例年の1か月分も雨が降る。即ち集中豪雨である。それがわずかずつ移動すれば「線状豪雨」となり、ある地点には1週間も豪雨が続く。当然下流は、土砂崩れや、河川氾濫となり激甚災害が発生する。そんなわけで、山裾や川の傍は、十分の対策がなければ、行政は、簡単に宅地造成の許可を与えてはいけない。俺の土地だから俺がどのように使おうとも勝手であろう……という理屈は通らない。

世に『村八分』という言葉がある。規律違反者に対する私的制裁(仲間外れ)である。しかし世の中には、人が何と言おうが、俺は俺流でやる……と啖呵を切る人もいる。村八分の残り2分は何か？ 答は、「葬式」と「火事」だそう。

死んだ自分の後始末は人様に頼るほかない。火事も同じ事。だからどんなに自分流で事をなそうと、必ず人様の世話になる部分はあるのだから、

世間の常識はしつかり守る必要があるという事なのである。要するに他人に迷惑が及ぶ可能性のある行為は、自由主義ではなく「勝手」主義なのである。

私は長年、家畜防疫の仕事をしてきたが、家畜の持ち主は、俺の家畜だから俺の好きなように飼育する……という理屈は通らない。予防注射や消毒をしないと、悪性の伝染病が発生すれば、すぐ近隣の農家に伝染し、大きな迷惑をかける。病気がない時には、予防注射や消毒は、余計な金と手間がかかる。なることなら省きたいのが人情ではあるが、病気が発生してから、慌てて予防注射や消毒では間に合わない。転ばぬ先の杖が必須である。それを怠って伝染病が蔓延すると行政の対応が悪いからと、警察に訴える猛者さえいる。私の役所も訴えられた経験があるが、1年間に11回もリーフレットなど発行して啓蒙に努めたが、平常時には見向きもしない。勿論警察は不当な告発として、却下してくれた。

話を戻せば、個人の土地利用や、宅地造成販売など、その土地の過去の古い歴史をしつかり紐解き、万全の体制を仕組む必要がある。地価をおもんばかって歪曲した判断は厳に慎むべきであると強く云いたい。

*

さて次は、多数の犠牲者が出た原因について考えてみたい。死者数の70%は60歳以上の事。あるニュース番組を見ていたら、35歳の息子が父親に、避難勧告が出ているので一緒に逃げようと催促すると、父親は、経験上そんな必要はない。あつても床下浸水が関の山。(実際は床上1.8mに達した)そもそも、ここは海拔12mもあるのに、何を考えられているのか……とすごい剣幕。海拔は海からの津波

の問題で、土石流や川の氾濫とは何の関係もない。因みにこの父親の年齢はわずか59歳との事。90歳ならともかく、59歳ならもつと諸般の事情に明晰であつてもよさそうなもの。恐らく万事がこの調子。このように少しの経験が逆に邪魔する現象を「経験の逆機能」というらしい。今回西日本で、避難勧告を受けた住民は860万人。しかし指定された場所に避難した人は3万人を割っているという調子込んでこんな事を書いている私として、いざとなつたら、どんな判断をするか分からないが……。

気象庁が世界最高級のコンピュータで、高度の警報を出しても住民の認識度が低く、コミュニケーションが機能しなければ、災害弱者等救われない。米国フロリダで、ハリケーンの襲来により360万人に避難勧告を出したところ、実際の避難者数は600万人であつたという。自分の命は自分で守る……は常識である。各自治体自身の体制も重要ではあるが、まず各個人の認識が重要である。

なお避難場所は学校の体育館などが指定されるが、学校は授業の場所。これほど災害の多い国なのであるから、広域の避難所が別にあつてもよい。普段は多目的に使用すればよい。各省庁連結で出資し、避難者が安心して過ごせる標準装備の施設に強化すべきである。勿論、学校教育においてもハザードマップや命を守る教育は日頃から大切。子供を通じて、親や祖父母の認識改善再教育を図るべきだ。他、仮設住宅、災害ごみ、インフラ修復等課題山積。ライフラインのストップは、あまりにも復興を遅らせる。国はハードのインフラ問題、ソフトの災害対策共同体の育成など、本腰を入れるべきだ。災害警報は、豪雨の音や深夜では聞こえないという。細かい対応が必要。私に言わせれば、オリンピックはやむを得ないとして、そ

の翌年あたりからオリンピック並みの傾注度で、多機能避難所建設など自然災害対策に全力を尽くすべきだ。

18年7月23日、埼玉県熊谷市で観測史上最高の41.1℃の猛暑を記録した。熱中症も災害の内である。学校のプールも、水温33℃では熱中症が発生するという事で、中止との事。

昭和56年の私の体験。県庁にいた時、小貝川堤防決壊で竜ヶ崎市などが大水害。畜産被害調査を命じられ、現場に急行。畜産農家を回るにも増水で動きが取れない。県庁から県警本部に、調査協力依頼を手配。すると警官と消防士が、汗だくでボートを漕ぎ、私を乗せ、畜産農家回りをしてくれた。牛は早めに高台に避難。しかし豚はどうにもならず、多くの豚舎は水没。殆どが溺死。しかし、中には10kmも泳いだ豚もいた。豚コレラの予防注射済み耳標から、長距離を泳いだ証明ができた。豚もおだてりや木に登る……ともいうが、4kgぐらい高い大きな木のY字股に、流れ着いた50kgほどの豚がしつかりしがみついている。さあ大変。私の依頼により警察官と消防士が、梯子をかけ、ロープで縛り、汗だくで豚の救援作戦。やっと降ろし耳標から元の持ち主を割り出し、持ち主に返した例もあつた。耳標は豚のマイナンバー。この時は警察と消防関係者に、心から感謝・感謝・感謝。

さて、警察のボートで農家巡回中、なんと民家の2階から老夫婦が手を振って、『お巡りさん、何か食べ物ねえかい』と必死で叫んでいる。勿論食糧など持つてゐるわけもない。実はこの夫婦は数時間前、消防が必ず避難するよう、あれほど説得したのに、俺は死んでも、ここを離れる気はない……と豪語した老人であるという。

こんな事情を鑑みると、まだ増水もしていないのに、即避難だ、逃げろ！と言われても、老人程はいそいそですか…と応じられないのかもしれない。避難勧告は上流の諸事情を勘案して、早めに出してこそ価値があるのだが、受け取る方は、間近に危険が迫らないと、行動の決断ができないらしい。結果は、高齢者が多い地区ほど、犠牲者が多くでる…という結末に至るようだ。それゆえ、東日本大震災の津波対策で言われたように、自分の命は、それぞれに、自分で守るという原則に従うほかないようである。

*

さて以上のように、日本列島は、毎年、大きな災害に見舞われる。お決まりの状態ならば、政府も予備費で対応するのではなく、当初予算で、既存の崖崩れ危険地域などから、半ば強制的に住居を移転させる。全国一気にとはいくまいが、重点予想される順番に、何年かかけて、移動させる。山間地が多く、適切な平地がない県は、国が主導で、他県に大量移住も考えたらい。各県とも人口減少に悩んでいるさなか、大量に人口を減らすような案件には、大きな抵抗があるだろう。しかし毎年の事でもあり、日本政府の大きな重荷でもあるのだから十分に予算転換を図り、県境などという些事に拘らず、後藤新平並みの雄大な構想で、試行錯誤を試みたらよい。私は道州制導入賛成。地方はしっかりと税収はなく、国の交付金に頼る始末では自立性がない。確たる税収を根拠に国の言いなりではなく、自主性を強化した連合国家が理想。自立県の自己解決が重要。国の役目は外交と防衛が主体。

【明治維新の廃藩置県は旧態継続で、慶応3年（1868年）王政復古。中央政府は江戸幕府から朝廷

に移った。当初、「藩」はそのまま「県」に置き換えたため、3府302県であったが、明治5年3府69県。最終的に明治22年現在の47都道府県に統合され、「県令」（知事）は中央政府から、旧藩出身ではない者が派遣された。

初代茨城県知事は山岡鉄舟。江戸本所出身。幕末三舟（他、勝海舟・高橋泥舟）の一人で子爵。尊王攘夷派。北辰一刀流の流れをくむ「一刀正伝無刀流」開祖。剣・禅・書の達人。父は蔵奉行の知行主。母は鹿島神宮神職の娘で先祖に塚原ト伝。勝海舟と西郷隆盛の仲立ちをし、江戸城無血開城を成し遂げる。明治維新は西郷・山岡の両豪傑が成し遂げた…とも云われた。友人に清水次郎長。188cm、108kg。53歳胃がんで没。】

*

茨城県など、山が少なく広大な平地が多く、耕地面積率は日本一。豊かな天領地であった。首都圏でもあり、港や高速道も発達している。空港もある。なお工場移転などで気になるのは、移転先の「活断層」であろう。関東地方には、恐れられている活断層が8本あるが、茨城県内は含まれず、日本の活断層一覧表に県内で唯一載っているのは、高萩活断層一本のみである。

時代遅れの「農地法」は早速改正して、日本列島を根本から改造したらよい。新平ほどのスケールではなくとも、田中角栄並みの展開力で、列島を改造すべきだ。茨城県は魅力度が云々されているが、暑さ寒さも、ほどよいし、果物や作物はなんでもとれる。海の幸も暖流・寒流両方豊か。口は荒いが、心は優しいし、美人も多い。しかも首都圏でありながら地価はかなり安い。いい事だらけ。マツダモーターズなど、企業丸ごと、どうぞいらつしやい。

*

さて地球温暖化の問題であるが、温暖化が進めば、海水が膨張し、南極や北極、更に高山の氷河等が解け、海水面は過去に100メートル以上昇った経緯がある。逆に氷河期には現在より100メートル以下した証拠もある。今から1万5千年前の氷河期に、モンゴロイドは陸地続きとなったベーリング地峡（現海峽は水深70メートル）を渡り、北米に進出した。逆に北米大陸で進化した「馬」は、北米で絶滅したが、一部生き残った馬が、ベーリング地峡を渡り、アジアに進出、繁栄を極め、現在の馬族の基礎となった。

温暖化現象は色々影響が多いが、今後心配されるのは、低地の水没のほかに、熱帯の悪性伝染病を媒介する「蚊」などが、緯度の高い所でも生存可能となり、マラリヤやデング熱などが中緯度地帯でも常在化する大変な事態である。文明が熱帯の奥地をかき回さなければ、おとなしくしていた各種病原体が、一斉に暴れ出し、最悪の場合、人類滅亡にさえ結びつく可能性がある。恐ろしいのは原水爆よりも、凶悪な病原体が人間の愚かな活動により活性化することである。

地球温暖化対策の決め手は世界の人々が贅沢を抑える事。物を作り過ぎない事。文明進化速度を緩める事。マッハ2のコンコルド失敗例があるのだから、新幹線ではもの足らず、すぐ「リニア」はいかなものか。もし人類に知恵があるなら、週末時計の針を進めない為の賢明の対策が必要である。未来の子孫に迷惑をかけない行動が、21世紀の我々の責務である。

多氣太郎

石岡の歴史を語る時の話として先月号に常陸平氏（大掾氏…だいじょうし）についての基礎的な話を書きました。書物の知識だけでは私のようなぼんくら頭の人間には穴の開いたバケツに知識というサラサラの液体を注ぎ込むだけでジャバジャバと音をたてながら漏れていつてしまします。また、理系人間である私は、得られた事象を論理的に考えて組み立てようとするために、大昔のことに関する虫食いだらけの歴史書や、時の権力者などが都合のよい色眼鏡で塗り固めたトンチンカンな書き物などに惑わされてなかなか自分で納得できるものにはならないようです。そのため少しでも知識が漏れ落ちないように何か別なものでこの穴をふさがなくてはなりません。この方法として私は、できるだけ現地に行つて、あまり書物に書かれていない、昔そこで暮らしていた人達の残した事象のカケラみたいなのを探し、見つけては昔を空想しながら開いた穴をふさごうと一見無駄と思えるようなことを続けてきました。

この「ふるさと風」の機関誌も12年を超え、会員が自分たちで印刷して、各会員がそれを無料で配布し、また色々な施設に置かせていただいています。私が選んだ配布先の一つにつくば市北条の「北条ふれあい館」（旧田村呉服店さん）があります。ここ数年にわたつて冊子を置かせていただいているのですが、北条という町を選んだのには少し訳があります。

この町も最近はずくば市の一角を占める街となり、イベントなどにつくばから学生さんなどがかなり占めるようになってきています。江戸時代に

筑波山参詣の玄関口として栄え、江戸時代末期に建てられた蔵を利用した「宮清大倉ベルリンフィロコンサート」や、昭和初期の建物を利用した「矢中の杜（やなかのもり）」などで地域おこしをしています。もちろんその前からブランド米として「筑波北条米」なども知られています。

でもそのもつと前の歴史はあまり知られていないようです。この石岡につながる歴史が過去にあったということをほとんどの方が知らないのです。いや知らないというよりも頭に開いた穴からややりこぼれてしまうようなのです。それは石岡という町がそれほど魅力が感じられないということもあるうかと思いますが、知られていないので興味が持たれないということもあるかもしれません。何か残念でしょうがありません。そこで数年前から石岡の地域誌であるこの「ふるさと風」を置かせていただいています。ただこも土日や休日しか開いていませんのでどれだけの人の目に触れるかは怪しいですが、それでも北条の街に「石岡」の名前の書かれた冊子などがあれば、それを目にして少しでも興味を抱いていただけるのではないかとの思いがあります。

さて、北条に行かれたことがある方は商店街の裏側に「水路」が張り巡らされているのを見たことがあるのではないかと思います。この水路は鎌倉時代の初頭に造られたもので田んぼの用水路や街の生活水としてこの時代に造られたことは大変な驚きです。この水路を整備したのが「多氣（たけ）太郎」といわれる人物です。今でも地元では8月上旬に「多氣太郎万灯祭」が行われています。

でも歴史の中では古くとも「小田氏」「佐竹氏」などの時代ばかりに注目が集まり、その前の時代の輝かしい歴史はあまりにも古くて心に留まらない

ようです。



現地の観光用イラストマップには商店街の西側に五輪塔の絵が描かれており、「多氣太郎の墓」と説明のある場所があります。これを見た時に私もすぐには気がつかなかったのですが、この多氣太郎さんは多氣大掾（たけのだいじょう）であつた多氣義幹（たけよしもと）のことだと気が付きました。うかつにもすぐに気がつかなかったのですが、この多氣義幹は石岡の歴史に名を刻んでいる重要人物です。この北条の裏手の小高い山が多氣城山または城山（じょうざん）といって幻の多氣城があつたところだといわれています。

写真は多氣太郎の墓といわれる五輪塔で、かなり大きな花崗岩でできています。多氣太郎の墓と

いうなら1193年頃のものとなりますが、この頃にこのように大きな五輪塔の墓が作られたかどうかはよくわかりません。また、死亡したのは駿河国で、地元の多気氏が建立したという無量院で後の時代に遺族などで駿河より英霊を祀る為にこの五輪塔が建てられたのかもしれない。

多気（たけ、たき）という名前もこの山の地名から来ているようですが、恐らく竹の木が生い茂っていた山であったのか、それとも昔の縄文時代の言葉からなのかどうかも想像するしかありませんが、常陸平氏の嫡男の正統氏族の系列です。

常陸平氏は、高望王が天皇より平氏の称号をもらって民間に下り、下総・常陸にやって来てこの地の豪族と手を組んで常陸大掾（ひたちだいじょう）の職位を得て、大変な権力や金を持つ大豪族になっていくのですが、その最初は高望王の長男「平国香」が常陸国真壁郡石田（現・茨城県筑西市）に住んで常陸大掾職を得て始まります。しかし、弟の子供の将門が起こした乱で命を落としてしまします。

その時に反将門派が集まっていたのがつくば市水守（みもり）で、将門を退治した国香の子「平貞盛（さだもり）」から常陸大掾職を継承していき大掾氏と呼ばれるようになります。住む所もこの「水守」となります。地名も水守（みもり）というだけあって、この頃から水を守る重要な職（水利権）にも就いていたのかもしれない。平貞盛の四男の「維衡（これひら）」が伊勢に渡り伊勢平氏となって後の平家といわれる「平清盛」などを輩出しています。常陸大掾職を継承していったのはこの貞盛の甥の「維幹（これもと）」が養子となつて継いで行きますが、この維幹が水守からこの北条の多気山に城を築いて移り住んだといわれています。そして「維幹」

―「為幹」―「繁幹」―「致幹」―「直幹」―「義幹」と多気大掾は繁栄を極めます。また小田氏などが勢力を伸ばしてきたのは金倉幕府の始まる頃です。

ではこの多気大掾氏がどれくらいの力があつたのかなどを逸話などに残されている事象を覗いてみましょう。

・維幹の時…「宇治拾遺物語」には維幹が京都に訴訟で上ったとき、高階成順の娘を見初め、妻にして常陸に帰った。二女をもうけたが、やがて歳月を経て妻は死んだ。その後維幹の妻の妹が夫の常陸介にしたがって常陸にやってきた。まもなく任期が終わって都に帰るとき、維幹は二女を遣わして餞別を贈らせた。二人の娘はそれぞれ逸物の良馬10疋ずつと、皮子（籠）を負った馬100疋ずつをおくつたので、常陸介は維幹の娘たちの富裕におどろいたという。

・為幹の時…寛仁4年（1020年）ころ、維幹・為幹父子の勢力は強大で、常陸介を圧倒するほどであった。当時、為幹は父と同じく従五位下に叙されており、富力和権力をもって粗暴な振る舞いが多かった。寛仁4年7月、紫式部の弟の常陸介藤原惟通（これみち）は常陸国府で死んだ。この時、為幹が惟通の妻子を奪い取り、強姦するという事件がおこった。惟通の母が朝廷に訴えたが、為幹は権力に任せて病気を理由に出頭しなかった。日々莫大な献物を貴族達に贈っており、結果として為幹は1年間京都に留められたが、1021年に罪を許された。

・繁幹の時…源義家（八幡太郎）の弟の新羅三郎

義光が常陸介在任中に重幹と婚姻関係を結んだ。嫡男の義業に繁幹の子清幹の女をめとらせ、生まれた昌義が佐竹氏の祖となった。

・致幹の時…後三年の役に参加。致幹の兄弟は、水戸および結城・真壁方面に進出した。清幹は吉田次郎といい、その3子は吉田太郎盛幹・行方次郎忠幹・鹿島三郎成幹で、それぞれ吉田・行方・鹿島氏の祖となった。「奥州後三年記」には、源頼家が安倍貞任を討つために陸奥国に下ったとき、多気権守宗基（致幹）の娘と旅の仮屋で逢い女子を生んだ。その子が美女で清原真衡（さねひら）は、この女を迎えて養子の成衡の妻にしたと記されている。

とこのように位では常陸介（すけ）などより下ですが、地方の利権をうまく握っていて莫大な財産を持つており、その財力では大掾氏の方が上だったのです。しかしその多気大掾氏もある事件をきっかけに滅びてしまうのですが、この事件にこの北条の水路が関係しているのです。

平安時代には中央では藤原氏が絶大な権力を持つていました。この藤原氏の流れをくむ宇都宮氏が下野の国で大きな力を持つていました。この宇都宮氏当主である宇都宮宗綱（八田宗綱）の四男に八田知家（ともえ）がおりました。知家は常陸国に触手を伸ばし、ひそかに常陸大掾職を横取りしようとして狙っていました。

治承4年（1180）に源頼朝が兵を挙げたときからいち早く源氏に味方し、功績を挙げ、奥州藤原氏の打倒などにも功績を挙げ、鎌倉幕府の合議制メンバー13人の一人となっています。鎌倉幕府

内で大きな力を持つようになりました。そして1933年の富士の巻き狩り（曾我兄弟の仇討ち事件）で疑心暗鬼に陥っていた源頼朝に、八田知家が「多気義幹が水路を構築し、鎌倉幕府に対抗するために城を築いている（義幹に謀反の動きあり）」との嘘を伝えたのです。元々頼朝が挙兵した時には多気義幹は一族である佐竹氏などとともに挙兵に抵抗していたのです。まあ疑い深くなっていた頼朝ですからこの換言話にもどこかにそのような芽があるとの疑念が捨てきれず、義幹を鎌倉に呼び出して大掾職を解き、常陸国の領地は没収され、駿河国に身を預けられ、そこで亡くなったといわれています。ここに権力を誇っていた多気大掾氏は滅んでしまいました。しかし、義幹の次男茂幹が芹沢氏となって常陸国に舞い戻って新撰組の芹沢鴨などが出る芹沢氏となっています。

また、この大掾（たいじょう）職も八田氏には渡らずに、多気氏（平氏）の一族である水戸の吉田氏に引き継がれました。

国の史跡に指定された小田城などはこの八田知家が鎌倉時代に鎌倉御家人として権力を持ち広大な平山城を築城したもので、多気山の城よりも後のものなのです。多気山では昔の城跡を掘り返し、発掘して公開していましたが、この多気大掾氏が構築したものなのか、それとももう少し後の時代に構築したものなのかは判断が分かれるようです。多気太郎という名も地元で愛されているというのが伝わってきます。長男は太郎でこの頃は続いていたのでしょうか。

この五輪塔の周りには畑や田んぼが広がっていました。遠い過去を偲ぶには良いところです。

私の学んだ労音の歴史から…

木下明男

私は1965年労音運動（職場サークルを主体とした音楽運動）に身を投じた。まだ20代の前半で東京の品川区大井町にある日本光学工業株式会社に勤めていた。そのころ職場や会社、社会の諸事情の中で労音のサークル活動に誘われたのでした。サークルの代表として地域活動にも参加し、次第に労音運動に感化されていく。

労音時代に学んだ音楽運動の歴史を思い起こしてみた。東京の各地域から集まった若者たちが「東京労音学校」に参加し、勉強を始めた。その時に学んだテキストから。

第三期（1961年～1965年）

労音運動の基本任務確立と実践の時間

（1）第7回全国労音連絡会議

「労音運動の基本任務」と「100万人の労音運動」が決定された意義

1959年から1960年へかけて、労音はあの偉大な《新安保反対闘争》に参加し、その経験を通して日本の独立・平和・民主主義が労音運動にとって重要な課題であることに身をもって体験した。また1960年から1961年にかけて「新安保体制の音楽版」というべき世界音楽祭の反対闘争を経て、政治と音楽が密接不可分の関係にあり、外国の文化支配に反対し、日本民族の音楽を働く者の立場で発展させなければならない事。1961年6月に、池田・ケネディ会談や安保条約の国内治安維持法とも言えるべき政暴法の反対闘争には、536人の音楽家・93団体の音楽舞踊集団の共同声明を出して闘いに立ち上がった。このような

情勢の中で、労音は試練のある民族的・民主主義的な闘いを経験して、11月第7回全国労音連絡会議が東京で開催された。会議は10年間の労音運動を総括し、特に当時の情勢で明らかにされた、新安保反対闘争や世界音楽祭反対運動が、労音運動との関連で討議され、闘いの経験に基づき「労音運動の基本任務」が決定された。

（1961年第7回全国労音連絡会議で採択）

労音運動の基本任務

労音運動は、日本民族の進歩的音楽運動の伝統を受け継ぎ発展させ、海外諸民族の民主的文化遺産に学び、芸術家、知識人並びに進歩的諸勢力と協力して、自分自身の成長と社会の進歩に役立つ音楽文化を創造することを目的としている。また、そのことによって勤労者の人間性を高め、その連帯性を強化する運動である。

労音運動は、勤労者の立場に立つ民主的な音楽運動である。その組織原則はサークルの活動を基礎にした民主的運営である。鑑賞を中心にした音楽運動であるから例会は労音運動の最も重要な環であり、例会内容を通じて勤労者の人間的な成長を進める。そのためには日本の勤労者の文化運動の一環として労働運動その他の民主運動との結合を強め、労音運動の発展を妨げる社会的障害とたたかう。

労音運動の基本任務と100万人の労音運動が決定されたことは、次のような画期的な意義を持っている。

- ① 全国の労音運動を基本任務のもとに政策的に一致させた。
- ② 外国の分化侵略、文化支配に反対し、日本民

族文化を労働者階級の立場で発展させることを明確にした。

- ③ 戦前からの音楽セクト性（日本音楽・クラシック・大衆音楽）を打ち破り、日本音楽の発展方向を明らかにした。

- ④ 労音運動の目的を明らかにし、労音運動の組織原則がサークルの活動にあることを明確にした。

- ⑤ 労音運動の発展を妨げる政治的課題と闘う方向を明らかにした。

- ⑥ 全国的な規模で労音運動の拡大計画が打ち出された。

（2）日本文化教育共同会議と第一回伝統音楽研究集会

新安保体制を文化面から強化することを目的とした日米文化教育合同会議が1953年一月に開かれた。この会議は「日米安保条約を続けるために必要な、知識的・文化的・政治的基礎を支えるためには、外交その他公式機関だけでは足りなくて、縦に深く日本人の中に入り込んで、アメリカへの信頼を植え付けなければならない。そのために、野球と大衆音楽が特に重要な役割をする」と言うコンロン報告（アメリカのコンロン・アソシエートの東南アジア担当のスカラピノ教授が中心になって作ったもので、アメリカ大統領に取り上げられ、アメリカのアジア支配の文化方針となつた）に基づいて開かれたもの。これは、アメリカが日本に対して取っている文化方針で当時の池田自民党政府に代表される日本の反動勢力は全面的にこれに協力して、日本人の民族的自覚と階級自覚を眠り込ませて、日本民族に対する信頼よりアメリカに対する信頼を大きくし、安保条約を何時までも続けようとするものです。アメリカが対

日支配の道具として、いかに文化を重視しているかは、ライシャワー駐日大使の来日によって一層明らかになった。

ライシャワー駐日大使は「アジア諸国を支配するには、軍事的武器や経済的武器にも増して思想の武器を使え。日本など左翼思想の行き渡っている国の場合、社会主義者の慣用語も使え」と言っている。このような方針のもとに、日米文化教育合同会議は、アメリカの退廃的な植民地文化を日本により一層導入するために「日米両国間の教育文化の交換のため2500万ドル（この時期のレートで90億円）の使用に関する交換公文」が発表され国会では、ガリオア・エロア資金のアメリカへの返済が問題となり、その上記の資金はガリオア・エロア資金を使用することになっていた。国民の間で税金の二重払いとして問題になった金です。つまり国民の血税が日本の文化を破壊し、支配する金として使われると言う全く日本国民を馬鹿にしたものだった。このような反動的な文化攻撃に対し、労音・うたごえ・わらび座・邦楽・クラシック・大衆音楽の専門家が協力し、東京労音の主催で第一回伝統音楽研究集会が1962年1月、上野の東京文化会館で開催された。田辺尚雄「日本音楽の特質について」・町田嘉章「民謡の発声と変遷について」・タカクラテル「ニッポン民族とニッポン音楽」の特別講演が行われ、その後音楽家から豊富な実践的経験が報告された。

総括で音楽評論家の山根銀二氏は次のように纏めた。

「此处でツクヅク感じるのは、私もこう言う日本の民族音楽の面については、少し考えてきた者の一人として、大分前から労音の仕事の中にこう云うものが反映しなければいけない。労音は良い音

楽を・安く聴く組織として出発し、そして良い音楽と言うのは西洋音楽であった訳です。ところが最早、そう言う段階に労音がいる事が出来なくなり、特に昨年の東京世界音楽祭に対する闘争を通じて、労音が急速に成長し、斯くも見事な展開を今行いつつあって、それを考えると感慨無量であります。その充実した新しい建設の仕事がどんどん展開するならば、我々がスローガンとして掲げている国民音楽の建設と言う事も単なる夢でなく、どんどん実際に解決され建設されて行く事になると確信するものです。」こうして、第一回伝統音楽研究集会は1951年度に決定された「労音運動の基本任務」を理論的に明らかにし、今までの労音運動の“良い音楽を安く多くの人に”と言う一般的スローガンを高め、クラシック・大衆音楽の分野ばかりでなく日本の民族的伝統的音楽の分野も含め、労働者階級の立場に立った音楽内容を創造すると言う基本的方向を明らかにした画期的会議でした。そして1964年と引き続き第二回、第三回の研究集会が持たれ、実践を総括し理論家する方向を打ち立てた。

（3）民族的・民主的・大衆的な音楽運動の発展 「労音運動の基本任務」は、先に述べたように安保闘争、世界音楽祭の闘いを通じて初めて作られ、労音運動の目的を明らかにした。安保闘争や世界音楽祭の闘いの経験がなかったら出来なかつたかもしれない。これらの事は、労音ばかりでなく日本人の民族的自覚が急速に高まったことが大きな基礎となつている。このような勤労者要求を基礎にしながら、今まで取り上げる事になかつた日本の音楽が例会に登場する事になった。ベートーヴェンの「第九」やショスタコーヴィ

ツチの「森の歌」ばかりでなく、日本の曲が欲しいと言う要求から始まった運動は、1961年12月に初めて平和の闘いを音楽作品にした「人間を返せ」を作り上げた。この作品は会員に大きな感動を与え、戦争を防ぎ平和を守る運動に影響を与えた。1963年2月、わらび座が初めて東京労

音例会に登場し、23例会5万人の会員が鑑賞した。この例会に参加した会員は、日本民族の優れた歌や踊りを初めて見て、日本文化の偉大さに打たれた。そうして、日本人としての民族的自覚と誇りを持つようになった。民族的な内容と形式を通じて日本人の誇りを持ちたいと言うばかりでなく、現在我々働く者の立場に立った音楽作品が欲しい

と言う要求に高まり、今年になって民族的形式を使い、内容は民族的且つ階級的内容を持った「甚兵衛」や、西洋の手法を使いながら内容は民族的且つ階級的内容を持った「山城国一揆」が出来上がった。こうした実践活動の中で今年の第13回総会では「すべての例会の中で、民族的・民主的・大衆的な要素を発展させよう」との方針となり、次のように方向が打ち出された。

これまでの例会づくりの活動から、私たち勤労者にとって真に共感と感動を呼んだ例会は「勤労者の生活感情に結びついて、労働と生活に潤いをもたらし、生きる明日への希望と勇気を与えてくれる進歩的内容を持ち、民族性溢れた分かり易い例会」です。これを一口に言うとは民族的・民主的・大衆的な音楽です。

民族的・植民地的な無国籍な傾向に反対し、音楽の内容に日本民族の要求、闘い、運命を反映するとともに、民族的風格をその形式に生かすこと。民主的・封建的な軍国主義な傾向に反対し、勤労者の立場に立った民主主義的な内容を反映する

と同時に、みんなで民主的に創り出すと言う事も含まれる。

大衆的・一部の人にしか判らないような音楽でなく、勤労大衆の心の底からの要求を反映し、全ての勤労大衆に判り、好まれ受け入れられるような内容と形式を持つこと。

この三つの要素は必ず発展させなければならないし、必ず勤労者の立場に立つて進めなければならない。

民族的・民主的・大衆的な音楽を発展させるためには、職場におけるサークル活動を通じて、勤労者の民族的自覚と階級的自覚を高める事を基礎として、日本伝統音楽の優れた遺産を受け継ぎ、海外民族の優れた音楽から学び、音楽専門家と広範な勤労者が協力し、労働者階級の立場に立つて運動を進める事が大切です。1964年1月から初めて労音運動の中で民謡や邦楽講座が持たれたことは特筆して置かねばならない。民族的・民主的・大衆的な音楽を創造する事と、直接的に結びついていくサークル、地域の音楽活動発展させる上で重要であるばかりでなく、日本の伝統音楽がそれまで持っていた封建制、セクト性を民主的に発展させる条件も作ったからです。

※次回は、第四期(1965年〜1970年) 労音運動の昂揚と後退です。

街地の三十数町内が常陸國總社宮より、神様の御分霊をお迎えし、地域を挙げてお祝いをする石岡のおまつりです。

常陸國總社宮では最も重要な祭り九月の例大祭で、十五日の神幸祭には三十数町内のうち十五町内が一年交代で迎える大役、年番町(今年は幸町)の代表である祭典委員長が社宝・天国の宝剣を授与され、神様の分身が乗られた大神輿に供奉します。

この宝剣は十六世紀に、常陸大掾氏最後の当主、清幹の父・貞国(二十三代目)が奉納した古代鉾の一部と言われている。

また大神輿には氏子町内から幌獅子(約三十台)と代表者約二千人が供奉し、大行列を組みます。

十六日は神様を「おもてなし」する様々な催しが行われる奉祝祭。奉納相撲、浦安の舞、染谷十二座神楽、獅子・山車の大行列が行われます。

最終日十七日は、二晩を過ごした年番町の仮殿を離れ、神様が本殿に戻られ、年番が次の町内へ引き継がれます。

氏子町内は祭礼期間中、神賑(しんしん)行事として幌獅子や山車を巡行させます。大神輿への供奉や奉祝祭の行列の他、「町中回り」と「会所回り」を行います。

町中回りは自町内、限なく御神徳を、行き渡らせるために練り歩くもので「会所回り」は交流のある他町中を訪れます。

さて今回の市指定文化財の紹介はおまつりで活躍する金丸町の山車と人形です。

○金丸町の山車人形「辨財天」一体

(附金丸町の山車飾り一式)

無形民俗

平成一六・三・二五指定

石岡市指定文化財(六)

兼平智恵子

今年もいよいよです。来たる九月十五日(土)、十六日(日)、十七日(月)の三日間、石岡市旧市

○金丸町の山車

無形民俗

平成一六・三・二五指定

金丸町の辨財天さまにつきましては、当会報78

号

にて紹介しておりますが改めてご案内いたします。金丸町と言いましたら、語り部の大高様、石岡の昭和の時代と共にすべてを知りつくしておられる、お方です。久し振りにお伺いして、驚きです。

「今年のおまつりが終わったら九〇歳だよ」と以前にお会いした時と全く変わらぬ、若々しさと優しい笑みとキラキラ輝く目、思わず歳を重ねた自分の姿をガラスに写し見ることでした。

天下祭り（徳川将軍の上覧をうける祭禮）と称された神田明神と山王神社の祭礼に供奉した百台を越える山車は、都電が張り巡らされた事など東京のご時勢の変化に対応して各町内の山車が売りに出され、金丸町では大正十一年春、日本橋魚市場本小田原町所有の山車と人形を購入、五日五晩かけて野宿しながら石岡まで運んだそうです。

ところが大正十二年関東大震災で、売りに出されていた山車と人形はほとんどが焼け出されてしまったそうです。辨財天さまと同じ身の青梅市森下町の「竹内宿禰（たけのうちのすくね）」など何体かは、震災前に購入され、助かりました。それぞれの地でその時代の優美さを誇っている事でしよう。

現在の金丸町では二体の辨財天さまと山車があり、文化財となっている日本橋生まれの辨財天さまはおまつりの際、天気の良い日は登場するそうです。

「見れば見るほど男心をそそる美形である」といわれているそうで、今年もお目にかかれますよ

うに。

しかし、お出になると雨が……のジンクスもささやかれているとか。

そして文化財である山車のほうは昭和四三か四四年頃に、郷土芸能の授業の一環として石岡小学校に贈呈されたそうです。

同じく文化財の山車飾り、三方を囲む幕には鶴が三羽づつ、計九羽の総刺繍、二度と作ることも出来ないだろうと言う豪華な逸品の幕。しかも、お祝い事には奇数で九羽の鶴に、大高様感心なされていた。

石岡の辨財天さま、青梅の竹内宿禰様、どちらも古河長延の作で必ず片手に宝珠を持っているのが特徴だそうです。

辨財天さまは左手に宝珠、右手に、木製で銀色に染められた鍵を持つ。なぜ？「辨財の財に關係、財を管理する倉庫の鍵という事になるでしょう」と大高様。尚、文化財である豪華な鶴の幕は、金丸町の会所で見られるそうです。

どうぞ皆様、今年は文化財の金丸町の辨財天さまにもご注目下さい。

大高様有難うございました。昭和の良き時代、不幸な時代お聞かせ下さい。またお伺いさせて頂きます。

※参考資料 今 なせ石岡・歴史

・理稀ちゃん！

尾島おじちゃんのこと

待っていたんだね

智恵子

H.30.3・10 移 六時半救出

御川筋を見ながら沖洲を行く

伊東弓子

いよいよ行方地区も今回で終わり。沖洲は狭いから簡単かなとたかをくくったのは間違いだった。有史以来、現代までの時の流れの中で、地理的なこと、そこに生活してきた人間の姿があったことを疎かにしたのは間違いだった。宮路先生からの紹介で尋ねた土地の方々は、とても好意的だった。資料も惜し気なく預けて頂けていたいたり、話しも前向きに進めていただけた。発掘に携わった大塚先生への想いは、みなさんの力の入った話からよく分かった。

三味塚古墳駐車場での集合はわかりやすかったようだ。塚の頂上から四方を眺めるにつけ、整った姿の古墳の美しさに、古代人の美学を改めて思う。千五百年も前の人達が大海の一部であったこの地に砂を積み、積み上げながら造ったものといわれているが、何を願い何を固辞しようとしたものか、畿内から来た人達はこの姿を見て、何を感じ受けとったのだろう。

今この地が知っていることは終戦後、土地の人の生活の場で、乾燥している塚に芋を保存していたという。又川の堤防が切れてその回収工事のために、古墳の土を大量に使うことになり掘り出した。その際出てきた品々は端の方に並べて置いたそう。いくら無学のわし等でも捨てちゃいけない、壊してはいけない物位分かりましたよ。況してや盗むなんてことは誰一人しませんでした。

所がこのどさくさに紛れ、知識ある人が幾つか持ち帰り、その屋敷の倉に今でも眠っているそうだ。罰当たりなことだ。今に罰が当たるよ、と皆言っていたそうだ。その後専門的に大塚先生達の発掘作業が始まったという。黄金に輝く冠は、こ

の島国に根を下ろした畿内人が、故郷を思い誇り高く被っていた物だろう。韓国から帰る時、山々の尾根を金色に夕陽が染めていた。その尾根に松の木が生えている。その松の木の間に馬が嘶き走っているようだった。又あの偉大なる冠に合いに行こう。と私は思っている。

ここ一体も波が押し寄せていたことだろう。田の畔を歩いている。途中二手に別れてみた。大人だけで肅々と歩くのもいいが茶目つ気を出して大声で呼んでみた。特別な返事はないが、笑い声が伝わってきたり手を振ってくれていた。

若い時、この田の辺りでお婆さん二人と話したことがある。青年会でも話題になっていた。「一丁歩単位」の田、大型機械で米を作ることにすると、若い者から年寄りに至る迄、大きな問題に入る頃だった。二人のお婆さんと話し、写真を撮ってくれた人がいた。田植えのたび、実りの秋を迎えるたび、老若男女が真剣に語り合った日々を懐かしむ。今は今の問題が山積みだ。

ほほえみの丘と名付けた休憩の場がある。そこで藤本さんが熱の籠った話をしてくださった。吹溜りというが正にそれ以上のこは修羅場だったそう。魚、家畜、木々、缶、ペットボトル、布他ありとあらゆる物が集まってきたゴミ捨て場の海辺だったという。ゴミ捨て場から現在の砂浜までになるには、並大抵の努力ではなかったことが、写真の記録や話しから窺える。長い時間がかかった中では一致団結も困難を何度乗り越えたかわからないそう。

「鳩の会」と名付けて励まし合ってきたそう。狩谷さんのご主人が亡くなった後も、みんなで力を合わせ、作業の後はこの「ほほえみの丘」で一息ついて次の力を貯えるそう。そこには小川の

高橋さんの句と、筑波山の絵があつて私たちをも癒してくれた。

・水の底 志りつくしたる 鳩

それにつけても私の考えている「婆さんのごみアート」は、

まだまだ努力しなければならない。ポプラの葉の囁きに送られて、沖洲の通りに入った。

勅使塚古墳のある狩谷卓へ伺うことになる。何度か伺ったが初めから好意的に受け入れてくださった。広い庭に松を主に、種々の木々が静かな佇まいで迎えてくれた。お隣も同じ名字で驚いたのは、勅使塚古墳を半分づつ管理していることだった。亡くなられたご主人が造られた山道をゆつくり上り出した。大きい石、小さい石の組み合わせもよく頂上へと案内してくれた。みなさん必死で上り、油断せず降りてきたところで一休み。差し入れをしてくださった菓子を頂きながら、みなさん達成感に溢れていた。足の痛みで上れなかった人とは、良い日を決めて伺うことにした。

通りの両側には家が続く。門構えの大きな家、狭くても小奇麗にしている家、大きな屋敷だがどこか淋し気の建物と様々だ。玉里が右前に見える。奥に八木、三ッ谷、高架津、小津、柏崎、田伏、左には行方が連なつて、御川筋の全体が一眺出来る。小川河岸を出た船が園部川から大きな顔を出して、幾つもの物語を残した辺りもすぐ近くに見える。沖洲の両端には田があり、畑は家の間にある程度で山、坂を上った所に多少ある。大半は漁をしていたのだろうか。この地から玉里へお嫁に来た人も何人かいる。

昔は浜辺近く迄、敷地があつたという宮福寺、今はお堂二ツ、山門が昔を物語るのみ、中央にある公民館が現代の中心となつて人々の集う所とな

っている様子がわかる。宮路先生の娘さんが小学生の頃の標語がああ頃のまま飾られている。重要文化財といわれる山門、柱もやがて真と筋になつてしまふのではないかと痛々しく思える。

二つの寺も資料に残るのみ、常福寺に住職もなく、葬儀が出来た時は近隣の寺へ頼みに行くそう。355号が頭の上を走っている隧道を潜つて坂を登る。薦の茎が茂る道を大日塚古墳にむかった。

この古墳は畑や林の中にあつて静かさの中にある。明治中頃、近くの畑で見つけた母猿の埴輪、子猿が背負われていたと思われる姿は誰が作ったものか、写真で見るとつけ、この猿に合いたいような、抱きつきたいような思いになる。

時間が足りなくなったため、芸術村へは四月桜の花の咲く頃、行くことにしたいということを報告する。夏に行われる県立歴史館での「三味塚古墳と舟塚古墳」の展示会のお知らせをした。本物を見ることが出来ることを強調しておいた。

それぞれの想いを語りながら、車のある三味塚古墳の駐車場へむかった。「今迄沖洲のこと、今日合った人のことを思いながら通る気持ちになるだろう、とある男の声がした。長い歴史をもつ古墳も人の手で保存されていくことになる。知った。土地の持ち主が管理してくれることが大切だ。放置されれば酷いことになる。地方のものは殆ど公的援助はないのが残念だ。

沖洲内のあるお堂の佛像が盗まれたという。佛を盗むとは罰当たりなことだ、と言っていた人がいるそう。でも私たち人間は悪く心も持ち、毎日をおくっている。何時、何時、悪心をもつかかわらない。そして何時、何時、良心にもどれるか。

怒りは収まらない

小林幸枝

動物愛護団体理事長が、動物虐待の容疑で書類送検されたニュースを見た。その虐待の実態がネットに流れて大騒ぎになった。私もそのネット動画を見たが、信じられない動画であった。

猫の頭に袋をかぶせて棒で叩いたり、床に落としたり、犬の首を絞めたりするものだった。これをしたのが動物保護団体の理事だったとは目も耳も疑ってしまう。しかもこの虐待は2016年から行っていたという。

人間の勝手でペットとして飼われ、面倒を見るのが大変だからと捨ててしまう。そのような犬や猫を保護して幸せな犬生、猫生を過ごせるようにと設立された保護団体の理事がその犬猫たちに虐待をするなどと言うことは、その人間性を疑ってしまう。

我が家にも捨てられた子犬や子猫を保護して、家族として暮らしているが、犬猫も感情をもって生きているのだから、人間の都合に合わせて静かにしていることはない。でも、だからと言って棒で叩いたりしたことはない。煩く騒ぐときは必ず何かの不満や要求を訴えている時なのだ。犬や猫の不満は飼い主の勝手な都合を押し付けた時に抗議する訴えなのだ。

我が家は皆聴覚障害を持っていますが、保護して家族になった犬達は、聴導犬の躰をしたわけではありませんが、訪問者があると「誰か来たよ」と教えてくれます。

茨城県では、殺処分リスト1の汚名を返上しよう、動物愛護団体やボランティアの人達が頑張っています。そんなときにこんなニュースを見ると悲しみよりも怒りを感じてしまいます。

最近のニュースを見ると、動物虐待だけでなく幼児虐待、介護老人の虐待など許しがたい話ばかりです。この地球に暮らす全ての生き物から弱者への虐待が何時になつたらなくなるのだろうか？と怒りがおさまりません。

父のこと（父の歴史1）

菊地孝夫

父菊地敏夫は埼玉県で育った。

旧制宇都宮師範学校（今の埼玉大学）の付属小学校に入り、二年生の時石岡に帰ってきて石岡尋常小学校に入る。そして旧制水戸中学に進学する。当時の弁論大会に作った英作文を見たことが、とても中学生のレベルではない。旺文社の全国模試でも上位に入ってメダルを貰っている。

東京商大（現一橋大学）を受験するが不合格。一年浪人をして横浜高等商業（現横浜国大経済）に入学した。

祖母の言によると一介のサラリーマンの子弟が上級学校に進むとは、身分不相応だと言われ、笑われたそうである。やっかみ半分ではあったろうが、確かに父の五人の同級生は医者の子や大地主の息子など所謂地方の名士・資産家の子供であった。豊かではないサラリーマンでは旧制中学に進学させるだけでも大変だったろう。

毎日コロッケばかり食わされたとか或る時こぼしていた。それだけ家計が苦しかったのだろう。

親元を離れ横浜に下宿したが、それをいいことに羽を伸ばし酒を覚え、映画を見まくったらしい。叔母によると仕送りを全部飲んでしまったこともあったという。

アメリカ映画をよく見たらしく下宿の壁には一面映画のポスターが貼ってあったという。

後年対アメリカの情報戦に関わった時、この経験が大いに役立ったことは間違いないだろう。アメリカ人の思考様式を理解出来たろうから。

他国の文化を知るのにも映像から得られる情報は大量であり役立つのである。

あるとき、クラシックのコンサートに行き、楽章の途切れたところで一人拍手をしてしまった。クラシックのオーケストラなど聞いたこともなく、演奏の終わりがどうかわからなかったのである。

大勢に失笑され、死ぬほど恥ずかしかったろう。恥をかいた父は以来、音楽嫌いになった。

昭和16年6月、父たちは海軍に召集される。実質的な徴兵である。アメリカとの戦争が避けられないと思った海軍首脳は、「学徒出陣」で知られる、予備学生制度を復活し、ひそかに繰り上げ卒業させて、招集した。

全国の旧高商の学生のうち、語学堪能ものを選抜し、情報将校を育てようとした。父を含め80名余り。その時の集合写真が残っている。海軍大学の前か何かで撮られた写真には、新しい軍服姿の見習士官として映っている。

これが第一期兵科海軍予備学生である。すぐに旧制大学の学生も加わり、総勢104名。第二期には阿川弘之氏が選抜されている。「春の城」にこの予備学生のことが描かれている。阿川氏は東大の国文科だったので、中国に渡り、重慶軍の暗号解読に成功する。第三期生がいわゆる学徒出陣組であり、神宮外苑での、雨の中の行進シーン是有名である。

このとき父たちはすでに海軍中尉として第一線

の任務に就いていた。

それまでの海軍には情報将校は数えるほどしかおらず、急きよ情報部門の拡充を図ったのである。わずかに二年足らずで中尉となるのはきわめて異例のことである。通常なら4・5年はかかる。士官学校を卒業し見習士官を経て1年後少尉となる。中尉となるのはまた1年以上かかる。

しかも帝国海軍・軍令部というトップの、しかもこの若さで潜水艦主任となる。同期生の中にはもう大尉となった人もいる。

戦後「復員」した父は石岡町役場に勤める。

戦争が終わったら当時人気のあった「日本光学」に無条件で採用されるという海軍の約束は反故となった。

仕方なく石岡町役場に勤め、開発公社理事として、柏原工業団地の土地買い上げ、市民会館の建設などに携わる。

昭和二年、宮島さと、と結婚。

昭和二十二年 長男 康夫（1967年9月1

6日没）

昭和二十三年 次・三男信夫（秀夫未熟児の為夭逝）

昭和二十五年 四男孝夫

昭和二十七年 長女真理子

韓国人に騙され、市の公印を押したため市役所を失職。

朝日生命石岡支店に勤める。

その後、自宅で塾を開く。やがて、カギや楽器の音楽教室を借りて、高校生相手の進学塾を開く。

数人の生徒だったが、一年目、一ツ橋一名、津田塾一名。翌年、一ツ橋二名。ほかにも合格者を出したと思われるが、記憶にない。ほかの塾が恐慌をきたし、あわてて新聞にちらしをはさんだ。

小・中学生相手には自宅で教えた。

長男康夫自死のあと、泰栄製作所・のちの泰栄商工（株）に勤める。

総務部長として、東京本社と八郷町両方に勤務する。

【風の談話室】

《読者投稿》

やささと暮らし 19

さと女

毎日のつぶやきが「あついあつい」そして、近所さんや友達と交わす言葉が「あついですね！あついね！」それにしても今年の夏は暑い

● 猛暑の中の日々

・ 近くのコンビニに氷を買いに行くが売り切れ。そのためクーラーボックスを持ってスーパーまで氷を買いにいったが、ここでも残り少なかった。この時期冷蔵庫に氷があるとホッとする。庭にはすずしげな花も色々咲いているのだが、氷には敵わない。

・ 暑さが和らいだある日、延ばし延ばしにしていた竹細工の宿題をやることにした。外に出ると風があり日陰は涼しかった。作っているのは野菜の収穫籠だがだんだん大きくなってしまい、中々うまくいかない。

・ 我家の荒れた畑に、四方八方へカボチャの蔓が伸びていたのは知っていたが、確かめていなかった。改めて葉の下を覗いて見ると吃驚！大きく立派なカボチャがゴロゴロ転がっている。昨年に生ごみを埋めた処から、自然に芽が出て育った様

だ？よくぞこんなに育ってくれた、まだ早いかな？と思ったが、待ちきれず夕食のお膳に、美味しく大満足だった。

・ この暑さの時期は、1日1回は麺類を頂く、そこで重要なのは薬味。庭を見ればアオジソ・茗荷・シウガとどれも麺と相性が良く食欲をそそる。ところが夫はネギしか食べない、なんともったいない事。雨の中、茗荷の葉をかき分けてみると、根元にはふくら育った物が、早速天麩羅に、季節の香りを楽しみながら頂きました。

・ 暑さのピークは明日らしい。皆さん少々お疲れ気味の様子、挨拶は暑いね、そして草が始末に負えないよ、嘆きばかり。朝夕の水やりも一仕事、そんな中可愛い花を見つけるとホッとする。今日は三時草さんじそが彼方此方咲いていた。此の花は雑草になるのかな？ほおって置くといくらでも増える。ピンクの可愛い花と丸い蕾が線香花火の様だねと誰かが言っていた。一汗流して採り立てのブルーベリーのスムージーで一息ついた。

● 盆迎え

・ 我家のお墓は、数分歩いた所にある共同墓地。お盆も近いので墓掃除に行く、序に墓地に行くまでの途中の道も掃除する。この道が長く、早朝とはいえ気温はドンドン上がり、汗は半端なく流れ落ちる。嘗て全身がこんなびっしょりになったことが、あったろうか？遅れて掃除に来たお隣の牛屋さん、夕べお産した親牛が熱中症で死んだよと話していた。子牛はと聞くと、初乳飲んでないからと言っていた。すでにこの夏、子牛2頭亡くしている。長年の経験が今年はだめだなと呟いていた。ほんとに動物も受難の酷暑ですね。

・ 毎年夏になると思い出す。我が家の近くにある

池、今は霞ヶ浦の水を引いて農業用水として使われている。私の子供の頃は山から綺麗な水が流れこみ、入江の様な所もあり夏はみんな泳いだものだった。4年生の夏、1軒先の同級生がその池で亡くなった。村中の大人たちが池に入り探していた姿が今も忘れられない。それ以後、水が怖い、泳げないのもその時の恐怖心のせいかも知れない。

●お盆

・一日目、朝から蒸し暑さで何とも不快な日、お墓へ行きお迎えと、新盆のお見舞いを済ませる。今年は泊り客も来ず静かなお盆。いつもと変わらない早朝の夫とコロの散歩。夫は年1度の検査結果(脳、心電図、胸、胃カメラ、大腸、超音波、骨密度など)すべて合格でした。お蔭さまで生かされています。

・二日目、なんて暑いんだろう、そろそろ夏バテと言うか、何となく疲れてきた感じがする。ブルーベリーが黒く実っているが、採ろうという気にもならない。それでもやることはやらねばならない。今日も新盆まいり、車も停めて置くと焼けるように暑くなる。友人の庭には、涼し気なカンナの花が咲いていて、ホッとします。

・三日目、真家のみたまおどりを見に行く。800年の伝統がある念仏踊り(無形民俗文化財) 毎年、旧盆を中心に佛寺の庭や新盆の家に集まり奉納されます。朝8時に明円寺から始まり4ヶ所で行われると言うので、行つて見ました。びんささらや、太鼓、笛に合わせ踊りが、花笠に、浴衣に。紅たすき小さな子供から大人まで50人位いたかな。暑い中小さなお子さんも大人達に交じつて一生懸命踊っていました。

●石岡散策、八郷散策

・石岡駅前商店街、3か所のステージが作られ、どのステージも熱い催し物が繰り広げられていた。キッズワークエリアも賑やか。飲食や物販のエリアも家族連れなどで大賑わい。普段静まり返っている駅前のエリアが今日は賑わっていた。夫は石岡の地酒で乾杯のブースで第一声を、マスを飲んでくじを引いたらなんと地酒が当たった。何とも暑い、熱い石岡駅前御幸通りでした。

・友人のカメラマンから、ひまわりを撮影したいので、咲いている所あるか?とメールが。早速ひまわり畑散策に出かけたら、三か所もありしかも満開に近かった。その日の午後早速撮影会。丁度楽市さんの近くの畑も満開だった。帰り楽市さんのログにお邪魔して休憩を、猛暑の中ホッと一息。・友人と陶房にて待ち合わせ、車の行き来もない部落の奥まった所、古民家とその陶房は有る。友人は大皿やコーヒーカップなどを求めた。帰り際野菜採つて行つたらと言われ、喜んで野菜の収穫を。昼食は陶房の主と一緒におそば屋さんへ。此処の器は彼の作品、何とも優しい器です。その後、アートサイト八郷の下見に、今年は茅葺屋根の下で陶芸教室の企画も、みんなでコーヒーカップを創るそうです。

・窓を開けるとひんやりとした風が、何時もの空気が違つてからりとしている。今日はオリブさんでのランチコンサートの日。この暑さ続きで皆さんの体調を心配したが、どなたも元氣一杯だった。メンバーが1人変わり若いフルートの方が入っていた。カホーンの飛び入り参加もあり楽しいコンサートになった。今回のランチはママ特製のお弁当で皆さん完食でした。

・爽やかな青空の下、アートサイト八郷を訪れた。茅葺屋根古民家で陶芸教室が開かれ、午前の会午

後の会と大盛況でした。地元の陶芸家志村先生の指導の下、それぞれ真剣に製作しており、親子連れやカップルさん、皆さん本当に楽しそうです。私は少し先生のお手伝い。古民家の土間には手作りの作品やポストカードなども販売されており、次々見学者が訪れていました。何時もは人通りのない田園風景に人の声が響き、若い学生さん達が活躍している姿を見るとワクワクします。茅葺古民家の大家さん。イベントに訪れる人の質問に答えたり、大サービスです。こんな山の中に嫁に来て、朝から晩まで山仕事散々したよと話していました。なるほど腰は相当に曲がっています。今は暇つぶしにわらをもじつて浅草の方に出荷しているとか。若者がオブジェに縄がいると指導を受けるが、何とも、何とも。

●暮らしの日々

・我が家のテラス前、蜘蛛が獲物を辛抱強くじつと待ってやつとゲット。明日はどうなっているだろう? 6月に、旧友たちと足利フラワーパークに行つた時、見事に咲いていたすかしゆり。見学の帰り、売店でワイワイ騒ぎながら買った球根。8月になって見事に咲いた。再び楽しかった思い出が蘇った。

・夕方、雨、風が強くなってきた。少し早いがコロの散歩を済ませておこうと歩きだすと、急に手が軽くなり綱だけに、コロは大分離れて走つて行く。私はサンダル、追いかけるようにも走れない。家に戻り夫の協力を、2人で雨風の中大搜索、1時間程探しても見つからず、今度は車で搜索。名前を呼んでも耳は遠いし大風は吹いているし、村の隅から隅まで走った。もうあきらめかけていた時緑色の堀の下に何か動くものが、近づいてみる

とコロだった。泥だらけで大分力尽きたようで、おやつをあげるとあつさり捕まった。2時間の捕物帳、私もぐったり、コロもぐったり。それにしてもどうして首輪と綱を繋ぐ金具が外れたのか。時に預かって貰う獣医さんが2本の綱で散歩に連れて行くワケはこういう事があるからだろうなと思った。

・台風13号は過ぎ去った。一時、雨、風激しく、刈り入れ近い稲が倒れるんではと心配したがひと安心。台風が去った空、青空も顔を出し、夕焼けも見えた。しかし蒸し暑い、湿度80%。我が家の前の田んぼ、此処にイノシシが現れた事はない。先日刈り入れ間近な田んぼに2本の道が、所々円形に稲が倒れている。台風の影響にしてはおかしい。聞いてみるとイノシシ2頭現れたと言っていた。とうとうここにも来たか。近隣の田んぼには電気柵をつけている所がほとんど、田んぼの主、イノシシ除けの薬でもまくか、と、果たして効き目があるのかな？

《風の呟き》

日本の夏

打田昇三

日本には四季が有り気候温暖：と言われてきたけれども、此のところ耐え難い猛暑が続き集中豪雨による被害などが多発している、大日本帝国も、熱帯地方の諸国並みになったような気がする。

二十何年も前の話になるが私は再就職で、つくば市に在る農林水産省の施設で働いていた。其処には外国人を含めて何百人も宿泊出来る寮と国際会議などが出来る講堂や食堂・売店・郵便局などから多くの教室・会議室が有り、私は現場の主任

として十数名の方と宿泊者の寝具準備交換、居室・大食堂・教室・会議室・屋内外の清掃及びゴミ回収、共同浴場の管理から庁舎を含む定期的な床面のワックス掛けなどを担当し毎日、役所に報告書を出していた。時にはペルーの大統領など要人が来る事もあり、秋篠宮も結婚公表の前日に許婚者同伴で来て研究発表をしている。其の時は役所から急に言われたので慌てて準備をした。

其の外人宿舎にエジプト人の、共に博士である夫妻が長期間滞在していて奥さんが日本（つくば市）で男の子を出産された。その坊やがもの（こ）ころ付いた時期にエジプトへ里帰りをしたのだが飛行機がカイロ空港に着いた途端に、日本生まれの坊やが「お家へ帰ろう！」と泣きだしたらしい。

それから一年ほどして博士夫妻はエジプトへ帰ることになった。或る日、私は奥さんに逢ったので「エジプトは暑くて大変ですね」と挨拶した。すると、奥さんは憤然として「ノー、ノー、ジャパン暑い！」と声を荒げて言ったのである。言われて見れば確かに暑い。それもエジプトの方を怒らせる程に暑くなったのである。国は防災政策などを熱帯地方並みに考え直すべきではないのか。

恥ずかしや私の勘違い

菅原茂美

これまで私は、諸悪の根源は「人口過剰」と考えてきた。人口が増えれば縄張り争いが激しくなる。その為にストレスが重なり、諸々の病気が発生。更に争いや戦争にまで発展する。

これまで私は何度も書いたが、狼は食糧となる鹿などが減れば、最上位ペア以外交尾をしない。食物連鎖の頂点に立つ所為もあるが、狼にはそ

のような高度の規律が厳然と存在する。しかし、人類は食糧があるうがなかるうが、むやみやたら子を産む。自律性がない。規律を重んじる「高度の統制力」が狼より低い：と思ってきた。地球の人口収容能力は50億人。今日、既に75億人。毎年、8500万人ずつ増加。今世紀半ばには100億人に達すると見込まれ、人口調整のため、愚かな企てが起きない事をただただ祈るのみ。人類生残のため、国際的な秩序の確立が最重要。無謀な人類の暴走が続けば、人類滅亡のシナリオが私の脳裏を掠める。小さな島で、バッタが増え過ぎ、草を食べ尽くし、集団飛蝗で飛び立ったなれの果てが、海の藻屑。

ではなぜ人類は人口が増え過ぎたか？ 同じ大型霊長類のオランウータン、ゴリラ、チンパンジー、ボノボのどの種を見ても、「年子」はなく、生涯産児数は数頭。人類はその倍近い。これら動物達に年子がないという事は、子育てに、一定期間を置き、授乳・育児中は排卵をしない。自動的制御システムが稼働。これに対し人類は妊娠中でさえも、雄を許す。この現象は一体なぜ起きたか？ 生理学に反するこの現実私の長年の疑問。それが最新の科学誌でやっと理解できた。人類の多産は、不見識でも不道徳でもない。やむに已まれぬ事情があったのだ。

人類がチンパンジーとの共通祖先から枝分かれし、密林から疎林のサバンナに進出し、直立二足歩行を始めた時、視力・聴力・嗅覚など、他の動物に比べ、遥かに劣る。さりとて、角・牙・鉤爪など生来の武器もなし。更に早い脚もなし。こうなれば、ネコ科の猛獣から逃れるためには、立ち上がって遠くまで見渡し、より早く敵を発見し、より早く逃げた者が生き残り、子孫を残す事ができ

る。立ち上がった時、より背が高く（足が長く、広い視野を見渡せる事が必須の条件。その願望が今日まで引き継がれ、スタイル改善へと繋がった。人類は体毛を失い、汗腺が発達し、気化熱で長距離走っても体温上昇が抑えられ、大型獣の肉を大量に得られ、体位が向上。更に背伸びをして700万年で1メートル伸びた。

さて、ここが私の勘違いの基。背が高く敵を素早く発見できるという事は敵からも素早く、こちらを発見されるという事。こんな簡単な理屈を見逃す私の脳味噌も知れたもの。そんなわけで森林に残った大型霊長類の仲間は、平地に降りても、危険が迫ればすぐ木に登り、難を逃れ、子供の死亡率はそんなにひどくない。

しかし人類の祖先は逃れようにも大きな木はまばら。即ち、野獣の餌食になる確率は非常に高くなる。その為、生命の原理に従い、多くの子を産み、多数が野獣の犠牲になっても、なにがしかが生き延びれば、子孫への命は受け継がれる。こういう事で人類は進化したらしい。

鮭の卵（筋子）は凡そ4千個、鯉の数の子はほぼ6万個。孵化した幼魚は、食物連鎖で数を減らしても、数匹が生き残り、命を繋ぐ野生の原理が定着する。これと同じ事が人類でも行われたのだという。

人類は排卵兆候を示さず、いつでもセックスOKの形に進化した裏には、このような理屈が内在していたようだ。今日、世界人口は増え続けているが、過剰に増えた理由は、多産で生まれた子供が医学の進歩や、衣食住の充実などにより、めつたに死なず、大方が成人になるまで成長するからである。人類の多産は、ふしだらでも不道德でもない。持って生まれた宿命なのだ。生き抜くため

に神が定めた尊い運命（さだめ）のようである。人類の進化史は、真に意味深である。大いに恋をすべし。

風と戯れて（1）

白井啓治

外に出てごらん

風が遊んでくれるよ

木々の

草々の

葉の揺れて拍手をしながら

踊りのリズムする

外に出てごらん

風が絵を描いてくれるよ

スイスイと

モクモクと

天のキャンバスを塗りつぶし

悪戯っ子する

外に出てごらん

風が声してくれるよ

ゆるゆると

ヒューヒューと

心の隙間を埋め尽くして

笑顔をくれる

外に出てごらん

風は誰にも平等をくれるよ

そよ風も

台風も

それなりに吹き飛ばしてくれる

君に代わって

スペイン旅行記（8月25日～7月5日）

木下明男

一昨年7月にギター文化館を退職して最初に考えたのは、これで二郎さんのスペイン旅行に参加できると思った事だった。そして、今年も二郎さんのツアーに参加した。今年は二郎さんの大学時代の先輩Nさんと高校時代の同級生Hさん、昨年一緒だった富士のIさん、二郎さんと野口さんの6人が今回のツアーメンバー。

6月25日の朝に関西空港で初顔合わせ、私以外は二郎さんのお弟子さんなので打ち解けるのは早かった。このメンバーでマドリッドまで約16時間。出国、入国のチェックは相変わらず厳しい、止むを得ないが生産性のないこの無駄な時間。



マドリッド空港に着くとガイドの河野さんの出迎え、1年ぶりの再会。この時期のスペインは強烈に暑いとIさんから聞いていたがそれほどもなく、それでも蒸れたような暑さと空気がドンヨリ。いよいよスペイン旅行が始まる。

●6月25日..日本との時差は7時間。マドリードは暑い、そして霽っている。河野さんがサハラ砂漠からの熱波と砂だと説明してくれる。ホテルに着いて、早速近くの店で軽くドリンクを…。



●6月26日..今日はセゴビア見学。首都マドリードの北側に位置し、冬は大変冷える人口5万人ほどの小さな街だが、多くの世界遺産を抱えている。崖の上に築かれた難攻不落の城「アルカサル」、イスラム文化の影響を強く受けた建築で複雑なスペインの歴史が垣間見え、要塞としてだけでなくバランスの取れた美的な感覚も感じられる。



その次に市内に建築されているローマ人の富と技術の結晶「ローマ大水道橋」。



そして威厳と気品に満ちた「セゴビア大聖堂」も見事



●6月27日..トイレもある大型バスで、車窓からの眺めを楽しみながらグラナダへ快適な5時間の旅。途中でランチタイム30分。雪の残るシエラネバダが見えてくるとグラナダに到着。あら？いつの間に路面電車が…。スペイン3日目、グラナダも暑い。夕食は蛸が名物でビールが美味しいレストラン。

この国の夕食は遅く始まる。8時にレストランに着いたが周りには誰もいない、多くの人が来始めた頃には、我々の食事は終了しホテルに戻る。スーパームーンが出ている暑いグラナダの街を漫ろ歩きに、10時過ぎでも賑やか、むしろこれからが本番、一句が浮かばない…。



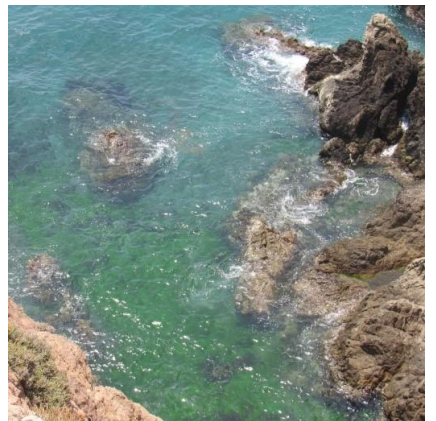
【特別企画】

打田升三の平家物語

巻九・（一・一）

都道府県制の前は文武天皇時代到大寶令（西暦七〇一年）で決めた六十八か国の「国制」であり、途中で少し変ったかも知れないが、平安時代には大國（判官職として大掾が置かれた国）が大和、河内、伊勢、武蔵、陸奥などの十三か国、そのうち上総、常陸、上野の三か国は淳和天皇時代の天長三年（八二六）九月六日に国主（守）は皇族と定められた。是を「親王任国」と言う。増え過ぎて困った皇族経費を捻出する為の臨時的な措置だが永続したらしい。三か国の収益が其の費用に当てられたのである。それでも扶養しきれない皇族は然るべき官職を与えられて民営化される。代表的なのが源氏と平家であり平家の場合は桓武天皇―葛原親王―高見王―高望王―平国香―平貞盛―維衡―忠盛―清盛の系統になる。

平清盛の場合は白河上皇から忠盛が拝領？した女性が母親らしいから皇族に近い血筋と言えないことは無いのであるが、源氏の場合は正統と目される頼朝でも清和天皇―貞純親王―源満仲―後は三つの流派に分かれた後に頼信―頼義―義家―義親―為義―義朝―頼朝になる。しかし義親が逆賊となつたので為義は祖父の義家に養われた。木曾義仲は義朝に二十人ほど居た弟（義賢Ⅱよしかた）の子である。父親が源氏同士の争いが原因で義朝らに討たれた為に、幼児の義仲は木曾山中で密かに育てられた。木曾の近辺から出たことが無いから世間を知らず全くの無名である。堂々と失言が出来る大臣が居たり、誰もが偉そうなことを言える



●6月28日…いつものように6時に目覚め、外を覗くとグラナダの朝景、今日も暑いかな？これから約200キロ東のアルメリアに向かう、チャーター車なので和気藹々と。グラナダを出ると直ぐに高速道路へ！猛烈な速度（140キロ超）で走り、一時間半ほどでアルメリア県に入り、海が近くになったと感じたあたりの湖に白い鳥の群れが、フラミンゴだ。



（つづく）

現代とは違い、当時は木曾義仲が京都を抑えて威張ってみたところで、平家のように国政の頂天に立つことなどは出来る筈も無いのである。

しかし其れを知らない義仲は、平家相手の合戦で勝ってしまったから、自分が天皇にもなれるものと錯覚して専横な振る舞いをした。是に対して天皇の器では無いと言われながら不幸にして天皇にされてしまった後白河法皇が、自分の立場に似た義仲を嫌い前後の見境も無く合戦を始めたのである。鼓判官が原因をつくった。

京都の混乱は関東の地で満を持していた源頼朝に千載一遇の機会を与え、合戦の天才とも言える源義経の指揮で軍勢が押し寄せることになった。同じ頃、西国に疎開していた平家が、未だ滅びていないことを証明するために都を目指しており、木曾義仲と平家軍と鎌倉勢と、現代の選挙のように選ぶ側が深刻に迷うような状況が出現した。

是から始まる巻第九から巻第十にかけてはドラマ、講談、映画演劇などで知られている合戦の場面が多く登場するのだが、その中心として活躍した源義経も、巻十一になると頼朝にうとまれて逃亡生活を余儀なくされることになる。命がけで頑張ったのに気の毒ではあるが、平家物語は最初に「諸行無常」を謳っているから嘘をつけない。

生ずきの沙汰（いけずきのさた）のこと

「生ずき」と書かれると食べ物に間違われそうだが、名馬の呼び名である。（尤も馬は人間に食べられるらしいから誤記とは言えない）此の馬の本名が「池月」であらうと思えば現代的な表記で「いけづき」とするところである。

寿永三年（一一八四）の元旦、後白河法皇の御所になつていたのは巻第八「山門御幸」で木曾義仲が貰った六条西洞院であつた。法住寺合戦の後に遷られたのである。元は法皇の近臣・平兼忠の屋敷であつたから御所の様には造られていない。したがって儀式なども出来ないで宮中で行われる正月行事は中止になった。その頃、平家は四国の屋島で新年を迎えており、此方でも言うなれば亡命先であるため、安徳天皇は居ても正月三日の行事などを行うことが出来なかつた。当然ながら九州から慣例的に献上される魚も届かず、祝の歌舞団は来ない。平家一門も「都ならば此の様なことは無いであらう」と嘆くばかりである。

やがて春が来て海から吹き来る風も穏やかになり、日足も伸びて長閑（のどか）になってはいたが平家の人々は、何時までも氷に閉ざされたような心境である。それは仏教で例える「寒苦鳥（かんくちゅう）ヒマラヤ山中に居ると伝えられる鳥で、夜中に寒さに苦しみがら目が昇ると忘れて巢を作らない」と同じである。庶民には出来ない贅沢な暮しだが、漢詩集にある文のように東岸・西岸の柳遅遅を交え、南枝・北枝の梅、開落已に異にして、花の朝あした、月の夜、詩歌・管弦・鞠（まり）・小弓（楊弓）・扇合・絵合・草づくし・虫づくし（持ち寄った草や虫を出し合い優劣を競う遊び）など様々に遊び興じたことを思い出しては長い日を暮らしかねているのも哀れである。

寿永三年正月十一日、木曾左馬頭義仲は法皇の御所に行つて、頼まれもしないのに平家追討の為に西国へ向かうことを報告した。十三日には京都を出発する予定でいたところ、東国から前兵衛佐頼朝が派遣した数万騎の軍勢が既に美濃国（岐阜南部）から伊勢国（三重）に入っているとの情報伝わってきた。義仲を討つためであるらしい。

なぜ頼朝が軍勢を向けたかと言うと、平家物語には書いてないが鼓判官が原因で合戦になったとくに、木曾義仲が軍勢を鼓舞して「…頼朝に笑われないような合戦をしる！」と言ったことが漏れたか、或いは後白河法皇が木曾軍の乱暴に耐えかねて頼朝に出動を求めたのかも知れない。何れにしても驚いた義仲は東海道から京都に入る要衝地点の宇治川に架かる橋と瀬田の唐橋に軍勢を派遣し防陣を布いた。しかし木曾義仲の兵力は法住寺合戦の時でも六、七千騎しか居なかつた（都入りした際には五万余の軍勢であつたが…）。

瀬田は大手であつたので今井四郎兼平が八百余騎で向かい、宇治橋には仁科（桓武平氏系信濃住人）、高梨（清和源氏系信濃住人）、山田次郎（信濃）が五百余騎で、京都久世の「いもあらい」原本は仮名で書いてあるが「一口」であらう」には義仲の伯父である志太三郎先生義教が三百余騎で向かつた。此の人は常陸国（現在の美浦村信太）に住んでいたらしい。「先生」は教職員では無くて東宮（皇太子）の警護に任ずる武士の前任者のことを言い「せんじょう」と読む。

攻めて来る東国の軍勢は大手（正面）の大將軍に蒲の冠者範頼、搦手（からめて）裏手の大將軍に九郎義経、いずれも頼朝の異母弟で、是に従う大名三十余人、総兵力は六万余騎と言われた。木曾勢に比べて桁違いの大軍勢である。

その頃、鎌倉に居た源頼朝は「池月・摺墨（いけづき・するすみ）」と言う二頭の名馬を持っていた。他にも多数の馬は居たと思うが此の二頭は格別なのであらう。（宇治川先陣でも触れる）此の度の出陣に際して梶原景時が池月を欲しがり頼朝に望んだが「此の馬は私が合戦に乗る馬だから与えられない。摺墨も劣らぬ名馬であるから…」と言って摺

墨が与えられた。景季の父・梶原平三景時は、関東に居た平家の武士であったが、石橋山合戦で頼朝の危難を見逃し、命を救った功績があるから景季が我儘を言ったのである。

景季の後で宇多源氏の佐々木四郎高綱が暇乞いに来た時に、頼朝は自分から「此の馬を欲しがる者は幾らも居るのだが、是を高綱に与えよう」と言つて池月をくれた。佐々木高綱は頼朝が挙兵した際に真っ先に駆け付けた武士であるが、当時は不遇で乗る馬が無く徒歩で来たことを頼朝が思い出したのかも知れない。(原本には書いてない)

感激した高綱は「此の御馬で宇治川を真っ先に渡ります。もし討死したと聞かれた場合には他人に先を越されたと思つてください。無事で居ると聞かれた場合には先陣を成し遂げたものと決めて頂いて結構です」と言い放つて退出した。頼朝側近の武士たちは高綱の言葉に「傍若無人の言い方をする」と囁き合つたのである。

頼朝が派遣した武士団は集団移動では無く各個前進で鎌倉を出立し或いは足柄山を越え、或いは箱根を抜け、思い思いに都(戦場)を目指した。

どちらの道を抜けても現在の沼津西方、浮島原で合流するので、先発した梶原源太は高台から武士団が来るのを見下ろしていた。武士を見ると言うよりも其の乗馬を見て、自分が頼朝から貰つてきた「摺墨」に勝る馬は居ない!と自慢したかったのである。次々と通過する武士たちは、晴れの出陣であるから自分の馬にそれぞれの鞍を置き「鞆(しりがけ)尾から尻に掛ける飾り紐」も色彩豊かにして、手綱も思い思い一人又は二人に曳かせ数え切れない程の武士団(騎馬)が西上して行く中で、確かに梶原源太が頼朝から貰つて来た摺墨に勝る馬は見当たらなかった。

自己満足をした源太が「馬の鑑定団」をやめて都に向かおうとした時に一目で「池月」と分かる名馬が出て来たのである。金で縁取りをした鞍を置き、小房を飾りにした鞆を掛け、荒馬の為に轡(くわ)を強く絞められて、多くの家臣たちが付いて制御しながらも、なお抑えきれない程の勢いで踊り上がりながら進んできた馬を見て梶原源太は思わず駆け寄り「其の馬は誰の馬か?」と訊ねた。家臣が「佐々木殿の御馬です」と答える。

源太は「心外な事である。(頼朝公が)同じ様に仕える此の景季を外して佐々木に恩寵を与えるとは恨めしい。それならば、都に上つて木曾殿の家来で四天王と言われる今井、樋口、梶、禰井(ねのい)に組んで死ぬか、そうでなければ西に向かい一騎当千と噂される平家の侍どもと戦つて死のうと決意していたけれども、それも意味がない。此の場で佐々木と組みあい、刺し違えて武士二人を死なせて頼朝公に損をさせよう!」と幼稚な考えを起こして待ち構えた。そこに、池月ではない馬に乗つた佐々木四郎高綱が、梶原の無謀な企み(たくらみ)を知らずに進んできた。

梶原は高綱に組もうと思つたが、先ず言葉を掛けて「佐々木殿は良く池月を賜つた者よ!」と言うと、高綱は事情を察し「…実は、此の度の出陣で都へ行くについて宇治や瀬田では橋が外されているでしょうから、川を渡る馬が欲しくて頼朝公に池月を望もうと思つたのですが、梶原殿でも貰えなかつたと聞きました。それなら此の高綱などが望んでも無理だと察して、後の事は考えず(勘当されても仕方がないと覺悟して)明け方に厩番を騙し頼朝公御秘蔵の池月を盗んできました!」と言えば梶原も怒りが収まり「それは羨ましいことをしたもののよ。この景季も盗めばよかった!」と大笑いを

して、その場を去つて行つた。なお国文学の先生が述べておられる説によれば、頼朝は平治の乱で敗れて落ちて行く源義朝・頼朝の父を佐々木高綱の父・佐々木秀能が死を賭して救出した忠義を考慮して池月を与えたようである。

(続く)

ふるさと風の会会員募集中!

当会では、「ふるさと(霞ヶ浦を中心とした周辺地域)の歴史・文化の再発見と創造を考える」仲間達を募集しております。自分達の住む国の暮らしと文化について真面目に考え、声高くふるさとを語り、考える方々の入会をお待ちしております。会の集まりは、月初めに会報作りを兼ねた懇親会と月末に雑談:勉強会を行っております。会費は月額2,000円。(会報印刷等の諸経費)

※入会に関するお問い合わせは下記会員まで。

白井 啓治 0299-24-2063 打田 昇三 0299-22-4400
兼平智恵子 0299-26-7178 伊東 弓子 0299-26-1659

編集事務局 〒315-0001

石岡市石岡13979-2
TEL 0299-24-2063

(白井啓治方)

<http://www.furusato-kaze.com/>